以上のべたように本書は、一鉱山の歴史として叙述されておりながら、地域社会の変遷との関連を重視し、さらに日本鉱業史のパースペクティブのなかに、しっかりと位置づけながらのべられている。また本書が、「史料編」が添えられていることは、本書の価値をさらに高めるものである。

（B5判　本編七二八頁　史料編二二〇頁　一九七〇年一二月　三井金属鉱業株式会社修史委員会編集非売品）

（池田敬正・府立大阪社会事業短期大学教授）

宇治市史1

宇治茶の名で茶の間にまで親しまれてきた宇治は、風光明媚な景勝の地ゆえに、早くから離宮や貴族の別業がおかれ、平等院や源氏物語宇治十帖に代表されるごとく、絢爛たる貴族文化が栄えたところであり、また地理的にも重要な位置をしめることから、宇治橋がかけられ、有名な断碑も残っている。さらに古く菟道稚郎子の伝承や、降って近世の黄檗山万福寺も、宇治にとって逸することのできないものであろう。奈良盆地と京都盆地北半以遠とをつなぐ地点であった宇治は、それゆえ中央の動向と密接にからみあいつつ、各時代にわたって刻みこまれた幾多の伝承・史蹟等にめぐまれている。

かかる宇治に、これまで市史の類がなかったことは、いささか奇異の感なしとしないが、近年の急激な都市化の波は、当市においても深刻なものがあり、この転換期にあって「急速な勢いで失われようとする過去の映像を整理・保存し、かつて宇治の歩んできた足どりを明らかにして、後世の人々に伝える責務が痛感され」（編者のことば）、昭和四五年から市史編纂事業が開始された。その後約三年をへて上梓されたのが、瀟洒な装訂をほどこし、随所に鮮明かつ適確な写真・図版・表をふんだんにもりこんだ本書である。副題を「古代の歴史と景観」とし、先史・古代を対象とするが、右の編纂意図は本巻にも明らかに貫かれ、「本編」に先だって「序説」を配し、地理的・歴史的な概観、地質、地形、生物、気候、産業、交通、人口問題、財政および都市計画の各方面にわたって、「宇治市の現勢をじっくり眺める」（二五ページ）ために、現在同市がかかえている種々の問題点を抉り出している。

「序説」につづく「本編」は、時代順に次の五つの章から構成されている。各章はそれぞれさらに節にわかれ、節ごとにその人を得てまことに興味ある論が展開されている。

序章　先史・古代の歴史と景観
第一章　先史文化と古代の開発
第二章　郡郷の成立と景観
第三章　王朝貴族と別業
第四章　院政期の庶民生活

まず序章では、当該時代の歴史的・地理的概観がこころみられ、「本編」の序をなすとともに、他方、総説的な位置をも占めている。

第一章では、古墳時代に至るまでの遺跡について詳述される。五世紀末の山背地方で十指に入る規模をもつ巨大な二子塚古墳や、著名な久津川古墳群とその被葬者の問

題などは、ここでとりあげられる。また宇治と切りはなすことのできない巨椋池や、書紀にみえる栗隈大溝を地理学的に検討し、さらに菟道稚郎子伝承、宇治の諸神社と信仰、記紀万葉に詠まれた宇治についても、それぞれの立場から論じられる。

第二章は、ほぼ七世紀中葉から八世紀の、律令制成立期から盛期を対象とし、宇治をふくむ京都盆地の計画古道、水上交通路、郡界と諸郷の位置、郡衙の比定、条里制など、およびそれとの関連で宇治橋断碑、山科郷古図などにつき、主に歴史地理学的手法によって示唆多き叙述を展開している。またこれまでに発見されたいくつかの寺院址と古墓、その造営者・被葬者をもとりあげている。

第三章は、平安遷都から摂関期までをあつかう。宇治氏や宇治陵墓群にふれたあと、宇治川や巨椋池をめぐって形成された宇治津・岡屋津・淀津などの津、宇治荘や笠取荘などの荘園についてのべる。つづいて平安貴族、とくに摂関家の浄土信仰の特質にふれ、藤原氏関係の諸寺院、なかんづく平等院とくに鳳凰堂につき、建築史・美術史の立場から、詳細に論じている。橋姫伝説や宇治十帖の世界も、本章のテーマの一つをなしている。

最後の第四章は、院政期をとりあげる。浄妙寺領や前章でふれた津と関係する諸荘園をとりあげつつ、当代における荘園の発展をみわたし、宇治に住む庶民の生活が、杣人や贄人・散所を通じて描かれ、さらに宇治神社の離宮祭と関連して、当地に発展した民衆の芸能にふれる。そして保元・平治の乱と宇治とのかかわりを叙述し、源平争乱の前夜で筆をおいている。

以上のごく簡単な要約では、とても本書のもつ豊富な内容を紹介することは出来ず、読者諸氏が実際に本書についてみることを至当とする。しかし右に記したことのみからでも、まことに様々な問題が、多くの視角と論点をもって配置されていることは窺えるし、同時に編集者の周到な配慮と力量のほどを見ることができる。かかる配慮は、いろいろな形で姿をあらわし、本書のもち味を醸し出している。前述した「序説」の設定などもその一つといえようが、そのほかにも、たとえば、各章の第一節は、その時代の大きな流れと、そこにおける宇治の位置が示されるが、宇治が歴史の中に確固とした地歩を占めてくる時期以後、つまり第二章以後は、同一筆者による一貫した叙述をもってこれにあて、宇治の位置づけに、大きな振幅なからしめんとしていることなどが挙げられるであろう。

さらに本書の特色をなすのは、諸分野の協力関係である。もともと対象たる宇治自身のもつ歴史的性格に規定され、美術史・建築史・文学史・宗教史その他、といった諸分野からの検討が要請されてくるが、とくに注目されるのは、「一地域の歴史的発展が、最も深く地理的景観とからみあった場所」という宇治観に裏打ちされて、歴史地理学の諸成果を、大きくとり入れていることであろう。かかる多くの分野からそれぞれの方法で、宇治の諸側面が照射され、全体として宇治の歴史像が浮彫される仕組になっている。

本巻につづいて、中世・近世・近現代篇

各一巻、資料篇二巻の刊行が企画されており、宇治市史は全六巻をもって完結する予定という。一日も早く全巻が完結し、宇治の歴史像の全貌があきらかにされることを望むとともに、関係者の多大な御努力に、深い敬意を表したい。

（A5判　本文六六三頁　索引その他五六頁　一九七三年一月　宇治市役所　三、〇〇〇円）

（栄原永遠男・京都大学大学院生）

『史林』投稿規定

本誌の投稿規定は次の通りです。

◇資格　本会会員であること。

◇投稿受付原稿の種類、長さなど。

○研究論文・研究ノート　四百字詰五〇枚程度。研究論文には四百字以内の「要約」と「英文要約」を添付のこと。原則として注釈は各章ごとに入れること。

○学界動向、批判と反省　四百字詰三〇枚以内。

○書評　四百字詰二〇枚以内。

○紹介　四百字詰三枚程度。

◇送先　『史林』編集委員会宛。

バックナンバーについて

前号でもお伝えしましたように、物価高と紙不足のため、本誌バックナンバーの価格を次の通り改定させていただきます。御了承下さい。

五五巻二号まで……三五〇円
五六巻六号まで……四五〇円

お申込は必ず前金にて、郵送の場合は送料（各冊三〇円）を添えてお願いいたします。

訂正

本誌第五六巻第六号に掲載された山尾幸久氏のノート「任那日本府と倭について」に誤植がありましたので、次のように訂正いたします。

一二八頁下段一行　大和朝廷→「大和朝廷」。
一四二頁下段六行　歓良城→歓良城。
一四三頁上段九行　奈勿麻立干今紀→奈勿麻立干紀
一四八頁上段一二行　泗沘→泗沘。

一九七四年二月二五日印刷
一九七四年三月一日発行　定価六〇〇円
史林（第五七巻第二号）
京都市左京区吉田本町
京都大学文学部
発行人　史学研究会
振替京都五一五五番
理事長　佐伯富
印刷所　京都市下京区西七条御所ノ内中町五〇
中村印刷株式会社